
平成 29 年

11 月の普及活動状況

ダイジェスト版

～県下 10 農林事務所農業普及課と農業経営課(農業革新支援センター)の取組～



岐阜県農政部農業経営課

新たなブランドづくり

岐阜農林■新たなブランドづくり 各務原にんじんスイーツ 「にんじんの日」にデビュー

各務原人参ブランド推進連絡協議会は、11月24日を「各務原にんじんの日」に定め、この日、市内量販店において、東海学院大学生が考案し、市菓子組合事業者が商品化した、にんじんのケーキやクッキー等5種類のにんじんスイーツを販売した。商品は大人気で、昼過ぎには完売した。また、市内全小中学校では、にんじんの日を含む1週間の給食に、にんじん料理が提供され、にんじん産地の街として共有された。

人参ブランド推進連絡協議会は、各務原市特産のにんじんのブランド化、地産地消の推進を通して農業経営の安定・向上に寄与することを目的に、JAぎふ、各務原市、同市商工会議所、東海学院大学、同市園芸振興会にんじん部会、当事務所で構成されている。

農業普及課では、にんじん産地戦略会議をリードし、産地振興・ブランド化を目的とする産地振興計画策定、上記のような産官学連携活動、にんじん部会の産地づくり等を継続的に支援している。



【並んだ5種類のスイーツ】

下呂農林■エゴマ エゴマ機能性プロジェクト推進会議を開催

11月7日、第3回「エゴマ機能性プロジェクト推進会議」が日本体育大学の杉田教授を招いて開催され、農業普及課も出席して、栽培状況など情報提供を行った。

このプロジェクトは、飛騨地域の特産作物であるあぶらえ（エゴマ）の機能性に着目した品種選抜や運動選手向けの加工品開発など、関係機関が連携した新たな取組みを進めている。

会議では、機能性を活かしたエゴマ製品のPR方法や新商品の開発に向けた意見交換が行われ、プロジェクトの成功に向け熱心な議論が行われた。

農業普及課は、引き続き「新たなブランド創出支援事業」を活用し生産の拡大に向け支援を行っていく。



【エゴマ新商品の開発に向け議論を交わす】

多様な担い手づくり

西濃農林■若手農業者女性交流会 ガールズトークで仲間づくり

11月24日、大垣市青墓地区センターにおいて、若手農業者女性交流会を開催した。昨年より女性農業経営アドバイザーと農林事務所の主催で実施している。今回は農産物を使ったおやつ作りと題して、アドバイザーが講師となり、身近な農作物を使ったおやつのレシピを日々の生活の中で試行錯誤しながら考案し、イベントなどで農産物と合わせてPRを図る活動等が紹介された。また、出来上がったおやつを食べながら、日々の農家生活や農作業の苦労や改善方法など情報交換を行い、新たな仲間作りの会となった。



【農業女子の活動を紹介するアドバイザー】

可茂農林■新規就農研修生 JAめぐみの集合研修

10月27日～11月24日の計4回、研修生および新規就農者向けの座学集合研修「植物生理1・2」「土壌肥料1・2」が開催され、管内から延べ18名が参加した。

農業普及課担当が講師となり、植物の生理生態に基づいて栽培管理技術が組み立てられていること、土壌診断と土づくり、効率的な施肥



【講義「植物生理1」】

法などを解説した。科学的根拠を理解することで、農家研修での実践的技術の強化が期待される。農業普及課では、研修の充実と新規就農者の早期経営確立に向けた支援を積極的に行っていく。

飛騨農林■青年農業士 若手農業者が“野望”を語る、『ひだファーマーズミーティング』！

県青年農業士連絡協議会飛騨支部では、会員の経営力・技術力向上のため、地域の若手農業者と連携して夜間勉強会を継続して実施してきた。

今年度は勉強会と別に、若手農業者の描く農業への熱い思いを語り合うための場として、11月9日に『ひだファーマーズミーティング』を実施した。当日は、「あなたの“野望”、聴かせてください」をテーマに、青年農業士に加え、4Hクラブ員・新規就農者・長期研修生など多彩な若手農業者17名が、各々の抱く野望に加えて、現状に対する悩みなどをグループに分かれ熱く意見を交わした。

多くの参加者からは「様々な年代の人から話を聞いて、とても勉強になった」「今年度中にもう1度集まって話しをしたい」などの意見が多く聞かれたため、農業普及課では、今後も青年農業士会飛騨支部

の活動を継続して支援し、若手農業者の連携強化に向けた事業推進を行っていく。



【軽い飲食をしながら、熱く意見を交わした】

農業革新支援センター■GAP 農業高校でのGAP研修会

11月9日に岐阜農林高等学校にて県内農業高校教員（畜産）を対象としたJGAP（家畜・畜産物）の研修会を開催した。

将来の農業の担い手である生徒が農業生産工程管理（GAP）を学び、自ら実践することが目的である。そのため、まず教員がGAPを理解し、生徒とともに取り組む準備を進めた。

研修会ではGAPの目指す最終的な目標は農畜産物の安全を確保して消費者を守り、地球環境を保全し、同時に持続的な農業経営を確立すること、農場HACCPとの差異などについて解説を行った。

革新支援専門員はJGAP（家畜・畜産物）指導員としてGAPの実践レベルの向上とGAP認証の取得を推進する。



【GAP研修会】

売れるブランドづくり

揖斐農林■柿 日本農業賞岐阜県代表として表彰を受ける

大野町かき振興会は、これまでの取り組みが認められ「日本農業賞岐阜県代表」に選出され、11月21日岐阜市内において表彰式が行われた。「大野の柿ブランドを守るため機能的な組織体系をつくっており今後の活躍が期待できる」と審査委員長の前澤岐阜大学教授からの講評を受け、加納会長からは、「評価いただいた組織体系は先人の努力のたまもの。組織の一層の改善に努め、組合員の経営改善や地域の活性化につなげていきたい」と抱負が語られた。

農業普及課は、今後も振興会の組織活動を支援し、産地をサポートしていきたい。



【受賞式の様子】

中濃農林■JAめぐみの営農指導員 生産部会担当者へGAP研修会を開催

11月27日に、JAめぐみのが、営農指導員及び生産部会担当者に向けたGAP研修会を開催した。GAP（農業生産工程管理）とは、農産物の安全確保、周辺環境と調和した農業、農作業者の安全確保を維持するための手法であり、農業普及課が講師となっ



【GAP研修会の様子】

てGAP制度及び、全国のGAPをめぐる情勢と県の取組みについて説明した。

東京オリンピックを契機に、GAPの取組みへの機運が高まるなか、中濃地域でも普及が始まっている。

J Aめぐみのと協力しながら、今後も農業生産部会へGAPの考え方を浸透させていく。

郡上農林■水稲 **第3回郡上おいしい米コンテスト決勝大会を開催**

11月23日、郡上市大和町の道の駅古今伝授の里やまにおいて、第3回郡上おいしい米コンテスト決勝大会が開催された。このコンテストは、郡上市農業振興協議会が主催するもので郡上産米の更なる食味向上とブランド化を目指して平成27年から開催している。

今回は、稲作農家だけでなく消費者も巻き込んだイベントとなる様に祝日に開催し、会場も大和町の道の駅とした。当日は市内稲作農家が出店し新米の試食販売を行ったり、郡上産米のパネル展示を行った。

一方、コンテスト決勝審査では応募のあった99点から食味計や味度計による予選審査を勝ち抜いた3点について、実際に炊飯して郡上調理師会員、出品農家一般消費者など合計89名で試食を行い最優秀賞と優秀賞を決定し、市長賞・農林事務所長賞・J A組合長賞を授与した。

今回のコンテストでは経験年数の浅い稲作農家2名が入賞するなど、意外な展開を見せ会場は大いに盛り上がった。今後、農業普及課では来年度高山市で開催される米・食味分析鑑定コンクールを見据えて、一層の良食味米づくりをすすめていく。



【コンテスト受賞者】

恵那農林■水稲 **地元産コシヒカリをPR ～消費拡大に向けて～**

「東美濃産コシヒカリ極良食味米産地確立プロジェクト」（構成員：生産者、J A、管内2市、中山間農業研究所中津川支所、農林事務所）では、11月12日に中津川市東美濃ふれあいセンターにおいて開催された「第13回ひがしみの農業祭」において、プロジェクト活動の紹介、地元産コシヒカリのPRを行った。

会場では、パネル展示、地元産コシヒカリの試食、米に関するアンケートを実施し、回答者には300gパックの地元産コシヒカリを贈呈した。約500名の消費者がブースを訪問し、試食では一様に「美味しい」との感想が伺え、好評を得た。

農業普及課をはじめとする同プロジェクトでは、地元産コシヒカリの極良食味米産地確立に向け、今後も関係機関が一丸となり取組みを継続する。



【PR活動の様子】

住みよい農村づくり

東濃農林■直売所出荷者等 **農業祭で地元農産物をPR ～地産地消の推進～**

東濃管内では、11月19日に瑞浪市、11月23日に土岐市、11月25日に多治見市において農業祭が開催された。

多治見市、瑞浪市の農業祭では農産物品評会が開催され、農業普及課では出品農産物の審査を行った。今年度は、秋野菜の生育時期の天候不良による影響があり、例年の半数程度と出品数は少なかったものの、品質の良い農産物が出品されていた。審査結果は、生産者の努力を評価するもので、今後の栽培意欲の向上につながることを期待している。

また、土岐市の農業祭では、地元の若手農業者の活動紹介や農産物の販売が行われ、地域農業のPRを支援した。

当地域では、「地産地消」による地域農業の振興を推進しており、農業普及課では、今後も様々な機会を通じて、地元農産物の生産・販売活動を支援していく。



【品評会表彰式の様子
(多治見市)】